

銅雀台——高台悲風多し

森田浩一

前 引

折戟沈沙鐵未銷 折戟沙に沈みて鉄未だ銷びず

自將磨洗認前朝 自ら磨洗を將て前朝を認む

東風不與周郎便 東風周郎の与に便せずんば

銅雀春深鎖二喬 銅雀春深く二喬を鎖ざさん

有名な、杜牧の「赤壁」の詩である。長江の岸辺に見つけた折れた戟に、前朝、唐に先立つ六朝という時間を懐しみ、歴史に「たら、れば」はないとはいいが、もしも赤壁の戦いで東風の助けがなかったなら、孫策と周瑜のもとにあった美女、喬氏のふたりのむすめたちも曹操に奪われて、きつと銅雀台に閉じこめられてしまひ、春の愁いに沈んだに違ひなからうと思いを巡らせている。

曹操が二喬を狙っていると周瑜に説き、みごとに呉を赤壁の戦に参加させた諸葛亮の手並みは、演義の世界に於いてゆき物語の語り手たちが虚構を膨らませた話であった⁽¹⁾。演義では、曹植の「登台賦」に、銅雀台に二喬を納れんとする望みをうたう二句を竄入し、諸葛亮に周瑜の前で歌わせるまでの脚色がほどこされているのだ。杜牧の詩にすでうかがわれるのは、国色と歌われた美女たちが亡国の人となりはてて、銅雀台という曹操たちを象徴する高殿に幽閉され、憂いの中にとざされることになったやもしれぬという想像をかき立てさせる脚色が成立していたことである⁽²⁾。

宋・齊・梁と活躍した沈約は、「詠月」という詩のなかで、曹操たちの時代——詩文の世界においては、建安という年号で象徴されてきた時代——を源流とする、詩歌の大きなテーマとなった風景を再構成する。

王中丞思遠の月を詠むに応うる詩（『文選』卷三十）

月華臨靜夜 月華靜夜に臨み

夜靜滅氣埃 夜靜かにして氣埃滅す

方暉竟戸入 方暉戸を竟して入り

圓影隙中來 円影隙中より來る

高樓切思婦 高樓に思婦は切たりて

西園遊上才 西園に上才遊ぶ

網軒映珠綴 網軒に珠綴映え

應門照綠苔 應門に緑苔照る

洞房殊未曉 洞房殊に未だ曉けず

清光信悠哉 清光信に悠たるかな

清い月の光のもとにある世界を、典故をいかして描き出しており、その典故のはた

らきは、読後に残る情景を、曹丕たちが遊んだ西園という庭園とそこに建てられた高殿や屋敷、そしてそこに憂いている女性の姿に収斂させる。

李善が注するように、第五句は曹植の「七哀詩」(『文選』卷二十三)にもとづき、第六句は、曹丕の「芙蓉池の作」(『文選』卷二十二)を直接の下敷きとしている。建安の文学集団のイメージが強く漂うこの対句は、沈約の同時代人たちに、これらの文学表現の源流としての象徴的な時代である建安を、具体的イメージを伴った場として喚起し、同時にその源流からこれらにいたる歴史を再認識せただろう。

第七句は、楚辞「招魂」に、第八句は班婕妤の「自傷の賦」にもとづくが、第五六句の情景の支配から抜け出すことはない。「招魂」がうたう、「罔戸朱綴」という魂が帰るべき故居の情景は、つかの間の遠遊に歎をきわめ、そしてやがて悲しみにつまれる公子たちの休息の場であり、苔むしたやしきにひっそりと余生を送る女性の姿は、班婕妤同様、失われた寵愛の時への回顧にうつろうものであろう。

第九句、物思いに沈む宮女たちの夜は長く、かくも澄み渡った月明のもと、人は思いをはるかに馳せるのである。森野繁夫氏が指摘されたように、末句の「悠哉」という表現は、周南「閔雎」の「悠哉悠哉、輾転反側す」を踏まえ、物思いに眠れぬ長い時間をイメージさせることばであると思われる。³⁾しかし、李善が「悠は遠きなり」と注するのは、月明のもとに輾転反側しつつ思う思いが、まさに時間的空間的に遠くまでひろがってゆくゆえであらう。詩の中の情景に想像された人物達の思いが、遠くへ広がってゆくだけではなく、沈約も読者も、詩の中の月下の空間を通じて、遠き建安へと思いを広げてゆくのであるという森野氏の言は、李善注の意と同じであらう。

ところで、「高樓の思婦」という形象は、詩文のなかで繰り返し取り上げられる。その高樓は、李善の注が引いた曹植の「七哀詩」にしてもそののであるが、ある特定の高樓と結びつく性格の物ではない。ただ、沈約の詩のように、西園の句と対になった場合、読者が銅雀台という高殿をイメージすることになる。

六朝文学の源流たる建安へと想念がたつらなつてゆくこの作品の中で、建安の才人達が遊ぶ西園という形象と、高樓の思婦という形象とが、象徴的に結合しているのである。

二一

『三国志』魏武帝紀によると、銅雀台は、建安十五年(210)に建てられた。陳寿は、「冬、銅雀台を作る」と記すだけであり、裴松之は注を付けない。陸侃如『中古文学繫年』は、建安十五年の項において、銅雀台についての資料を摘録するが、それによれば、左思が「魏都賦」に「三台列峙して以て崢嶸たり」とうたった、金虎台・氷井台について知ることができる。陸氏の挙げた文献をてがかりに、銅雀台という建物自体について、まず眺めておこう。

銅雀台は、鄴の北城の城壁を基礎に建てられ、高さは十丈、周囲は百二十間ほどであった。金虎・氷井の二台は高さ八丈と少し低いが、台が建つ城の西北隅から西面にかけては台閣が相い連なるまことに壯觀といふべき眺めであった。⁴⁾

銅雀台成った年、曹操は、子供達を台に登らせ、めいめいに賦を作らせた。ことは『三国志』曹植伝(卷十九)に見えている。曹操は、筆を援つてたちどころに賦一篇を書き上げ、曹操をおおいに感心させたのであるが、この時の賦は裴注に陰澹の魏紀から引かれている。⁵⁾

從明后而嬉游兮	明后に従いて嬉遊し
登層臺以娛情	層臺に登りて以て情を娛しましむ
見太府之廣開兮	太府の広く開けるを見
觀聖德之所營	聖徳の営みし所を觀る
建高門之嵯峨兮	高門の嵯峨たるを建て
浮雙闕乎大清	双闕を太清に浮かぶ
立中天之華觀兮	中天に華觀を建て
連飛閣乎西城	飛閣を西城に連ぬ

今残される作品の冒頭の八句である。賦は台の壯觀なようすから歌い始めて、曹操をことごとく内容が以下に続いている。また、『芸文類聚』卷六十二には、曹丕の

「登台賦」も収録されている。この賦には序文がついており、「建安十七年春、□西園に遊ぶ。銅雀台に登り、余が兄弟に命じて竝びに作らしむ」とあり、製作年が特定できる。

登高臺以騁望 高台に登りて以て望を騁せ
好靈雀之麗媚 靈雀の麗媚たるを好む

飛閣崛其特起 飛閣崛として其れ特起し

層樓儼以承天 層樓儼として以て天を承く

步道遙以容與 歩みつ道遙して以て容与たり

聊遊目于西山 聊か目を西山に遊ばしむ

溪谷紆以交錯 溪谷は紆として以て交錯し

草木鬱其相連 草木は鬱として其れ相連なる

風飄飄而吹衣 風は飄飄として衣を吹き

鳥飛鳴而過前 鳥は飛鳴して前を過ぐ

申躊躇以周覽 申びて躊躇し以て周覽し

臨城隅之通川 城隅の川に通づるに臨む

親子でくつろぐ遊行の一日が窺えるが、曹植伝の記載と曹丕の賦の序文を照らし合わせ、また、現存する部分の両作品について比較すれば、どうも同時の作ではないように思われる。⁶⁾

曹丕の作品にあるように、「公讌詩」や「芙蓉池の作」といった作品群の舞台として有名であり、曹丕・植兄弟を中心とする建安の文学集団の遊びの場であった西園に隣接して銅雀台は存在し、「魏都賦」の李善注に言う銅雀園という庭園と西園とは同じ場所を指しているであろうということがわかった。

ところで、高殿は、力と富の象徴である。特に古代にあっては、それはまったく力のシンボルであった。

『詩経』『靈台』の詩などは、かかる権力の持ち主たる王——詩序によると文王——の徳を褒め称える歌であるが、一方、宋玉「風の賦」の楚の襄王などは、暗愚な台

上の権力者であり、諷諭の対象となっている。「京都」の賦の一群に表現される高殿も、国力、そして主宰者である皇帝の権力の象徴である。⁷⁾

曹植の「登第の賦」も、この権力の象徴としての高殿をうたう作品の系列に属するものである。しかし、本論の関心は、このような作品には向かわない。高殿という作品の場が、権力の称揚のためにあるのではなく、主に個人の心情を発露させるために機能している作品に注意をそそぐこととしよう。

取り上げねばならないのは、王粲の「登樓の賦」であろう。長いので、コメントを加えつつ摘句してゆく。

登茲樓以四望兮 茲の樓に登りて以て四望し

聊暇日以銷憂 聊か暇日以て憂いを銷さん

冒頭の二句である。他郷にあって、しかも不遇な状況にいる自分の抱く憂いを癒さんとして王粲は樓に登り遠望する。李善は、ここに馮衍の「顯志の賦」(『後漢書』卷二十八下)の「朱樓に伏して四望し、三秀の華英を采る」という二句と、楚辞「九章」「思美人」の「遷逴として次りて驅くる勿く、聊か仮日もて以て時を須(李善作消)つ」、また、辺讓の「章華台の賦」(『後漢書』八十下)の「弥日以て憂いを銷さんことを冀う」という三例を引く。いささかくどくなるが、重要な意味を持つ注であると思われるので、みておく。

後漢初めの馮衍の作品は、失志の賦の系統に属するものである。馮衍は、世に志を得ず、隠居し、作品中の空想の世界に遠遊するのであるが、李善が引く二句は、遠遊の描写の終わり近くに現れ、仙界の樓閣に隠れ棲み、靈験ある草華を取る、ということ述べているところである(この作品については、すでに斎藤希史氏による考察がある⁹⁾)。楚辞「招魂」の乱を襲った表現に始まるこの賦は、いわゆる「遠遊」の作品に系列づけることが可能な、騷体の作品である。李善注の他の二例も騷体のスタイルであることは、王粲の賦が騷体であることを勿論意識しており、「登樓の賦」を三例の作品と系列づけようとする意図があるだろう。

ただ、王粲の場合、馮衍と同じく不遇の身にはありながらも、作品の中で遠遊は

行わない。王粲が作品の中で表現したのは、現実可实现な行動である登楼であった。遠遊が精神的な運動であり、あくまでも文学作品という表現の上でのみ実現可能なことであって、馮衍の登楼が、あくまでも想像の中の行動にすぎなかったのに対して、王粲の登楼は現実のなかでの行動であった。「登楼の賦」：

北彌陶牧 北のかた陶牧に弥り

西接昭丘 西のかた昭丘に接す

華實蔽野 華実は野を蔽い

黍稷盈疇 黍稷は疇に盈つ

雖信美而非吾土兮 信に美なりと雖も吾が土に非ず

曾何足以少留 曾ち何ぞ以て少らく留まるに足らん

楼の上から遥かに見渡す眺めは、まことに麗しい。しかし、わが故郷ではないので、長くはとどまれぬと歌う。李善はここに「離騷」の、屈原が遠遊の過程で宓妃の様子を表現した「厥の美を保ちて以て驕傲し、日に康らかに娯しみて以て淫しく遊ぶ。信に美なりと雖も礼無く、来りて遺棄して改めて求めん」から句を引き注する。単純に対比すれば、王粲の眼前に広がる美しい自然は、屈原が出会った、美しさに驕り高ぶり悠久の時間に遊ぶ神女に相当するであろうか。

自然は悠久の時間の中にあり、人は有限の時間の中にある。自然を前に、王粲がしばらくもここにとどまっておれぬ、と焦るのはまことにもつともなことであろう。作品の末尾近く、王粲は、「日月の逾え邁くを惟い、河清を俟ちて其れ未だ極らず」という表現で、この焦りを明確にあらわしている。あるいは、楼から見渡す空間の広さの果てを「陶牧」・「昭丘」といった富と権力の象徴たる古人の墓所で表現するのも、人の一生の短さと、人には如何に今自分のものとへ手繰り寄せようとしても、取り戻せぬ場——時間の彼方にある過去——が確固として存在しているという意識ゆえのことかもしれない。

「紛濁に遭いて遷り逝き、漫として紀を踰えて以て今に迄る」、目を極めても彼方の山に遮られて見えぬ「旧郷」は空間的に王粲から隔てられているだけではなく、

彼の思いの中で、時の彼方にあつて、二度と戻ることのできない場、しかし、いつか帰るべき場として王粲を招きよせているのである。離別の悲しみの対象は、遠くであり、離別の回想は、いつも過去へと遡る。まことに、「良時は再び至らず」、時は悲しいまでに不可逆なのだ。

楚辞「九章」「思美人」の「遷逴として次りて駆くる勿く、聊か假日もて以て時を須(李善作消)つ」も、辺讓の「章華台の賦」の「弥日以て憂いを銷さんことを冀う」も、のんびりとして心をゆったりとさせ、それによって憂いを振り払おうとするのであるが、人の苦しみ悩みを解脱した神女などとは違って、人間たるもの、そうはゆかず、のんびりしようと楼に登った王粲は、すぐにまた、しばしもここにはとどまれぬという思いに囚われてしまうのであった。賦は、胸ふたぐ思いに、深更けて寝付かれず寝返りを打ち続ける王粲の姿を描写して終わる。そういえば、沈約の詩の、月の光に思いに沈む者達も、眠られぬままに思いを巡らし続けたのであった。

三三

沈約の詩に戻れば、そこには六朝の詩人が好んだモチーフである「高樓の思婦」がうたわれていた。このモチーフに、詩人達は「離思」の苦しみをいかに切なく表現できるか挑戦し続けたように思える。銅雀台についての本論へ入ってゆく前に、少しこの「高樓の思婦」について眺めておきたい。

斂色金星聚 色を斂めて金星聚まり

榮悲玉筋流 悲しみを榮らして玉筋流る

願君看海氣 願わくは君海氣を見て

憶妾上高樓 妾の高樓に上るを憶わんことを

梁・武陵王紀の作とされる「閨妾の征人に寄す」る詩(『玉台新詠』卷七)である。第1・2句の意味するところ、よくわからないが、3・4句は、非常に斬新な

着想による。旅に出た男に、蜃気楼に浮かびあがった楼に登ってかれを遠望する自分の姿を思い起こしてほしいと、女性は願うのである。「憶う」という措辞は、単に思うということではなく、男性出立のとき、振り返り見た楼上看送る女性の姿を思い起こすことであるが、二人の遙かな距離的な隔たりと時間的な隔たりが、「海気」の中にゆらいでいるかのようである。

もっとも、この作品は、『玉台新詠』の注が指摘するように、少々出所が知れないものであり、実際の作品成立は時代がかなり下ると思われるのだが、高樓思婦の諸作品に類を見いだしたい発想である。¹⁰⁾

デイエニイ氏がつとに指摘されたように、そもそも、高樓に登り思う人を眺めるのは、ただ眺めるためではなく、相手に見られる位置に身を置くことによつて、想像力の力で相手との再会を果たさんとする行為であったと思われる。¹¹⁾

さて、「高樓の思婦」をモチーフとした五言詩の先駆けとして、この古詩を上げよう。

青青河畔草	青青たり河畔の草
鬱鬱園中柳	鬱鬱たり園中の柳
盈盈樓上女	盈盈たる樓上の女
皎皎當窗牖	皎皎として窓牖に当たる
娥娥紅粉妝	娥娥たり紅粉の妝
織織出素手	織織として素手を出す
昔爲倡家女	昔倡家の女たりて
今爲蕩子婦	今蕩子の婦為り
蕩子行不歸	蕩子行きて歸らず
空牀難獨守	空牀独り守り難し

(古詩十九首の二)

「蕩子」(旅に出て帰らない男)に嫁ぐ前、歌姫であった女性を描くこの作品は、たたみかける疊語で、緑溢れる美しい情景と、そこに聳え立つ樓上の窓辺に立つ美しい女性の姿を聴覚・視覚に訴えかけて描き出している。

「青青河畔草」といえば、『文選』卷二十七の「飲馬長城窟行」が連想される。『玉台新詠』では蔡邕の作とされる作品で、高樓という場は現れないが、他郷に在る夫を懐う女性の姿が歌われている。

青青河邊草	青青たり河辺の草
緜緜思遠道	緜緜として遠道を思う
遠道不可思	遠道思うべからず
夙昔夢見之	夙昔夢に之に見う
夢見在我傍	夢に見うに我が傍らに在れども
忽覺在佗鄉	忽ち覺むるに佗郷に在り
佗郷各異縣	佗郷各おの県を異にし
輾轉不可見	輾轉して見ゆべからず
枯桑知天風	枯桑は天の風を知り
海水知天寒	海水は天の寒きを知る
入門各自媚	門に入れども各おの自ら媚ぶ
誰肯相爲言	誰か肯えて相い為に言わん
客從遠方來	客遠方より來りて
遺我雙鯉魚	我に雙鯉魚を遺る
呼兒烹鯉魚	兒を呼びて鯉魚を烹しむれば
中有尺素書	中に尺素書有り
長跪讀素書	長跪して素書を読むに
書上竟何如	書上竟に何如
上有加餐食	上に有り餐食を加えよと
下有長相憶	下に有り長く相い憶わんと

ここには、高樓に上るということは現れていないが、空間的に隔てられた相手と想像力によって再会を果たそうとする、ひとつの手だてとして夢が登場している。

傅玄の「飲馬長城窟行」(『樂府詩集』卷三十八)もこう歌う、

感物懷思、心に感じて思心を懐き

夢想發中情 夢に想いて中情を発く

夢君如鴛鴦 君を夢みて鴛鴦の如く

比翼雲間翔 翼を比べて雲間に翔る

既覺寂無見 既に覚むるに寂として見る無く

曠如參與商 曠として参と商の如し

夢君結同心 君を夢みて同心を結び

比翼遊北林 翼を比べて北林に遊ぶ

既覺寂無見 既に覚むるに寂として見る無く

曠如參與商 曠として参と商の如し

鳥となつて翔け飛ぶことも、夢みることも、「離思」を懐くものにとつては、いずれもひとしく心に翼を持たせ、物理的に再会不可能な相手と想像裡に再会せんとする行為なのである。そして、つまりは、すべてが夢と同じく、いずれは覚めざるを得ず、墜落せずにはおれないのだ。実現可能な行為であるとはいへ、登楼も、詩の中の行為としての機能は、飛翔や夢と同様であろう。高樓から眺めやる遙かな距離が、別れた時から今に至る時間の差をはらむものであったのと同様、夢に見る相手と別れた時の相手との間には、やはり飛び越えられない夢路の距離が存在している。

また、古詩十九首の十六：

獨宿累長夜 独宿 長夜を累ね

夢想見容暉 夢想して容暉を見る

良人惟古歡 良人古歡を惟い

枉駕惠前綏 駕を枉げて前綏を惠す

願得長巧笑 願わくは長に巧笑し

携手同車歸 手を携えて車を同にして帰るを得ん

夢の中で会った夫の姿は、別れたときの姿そのままに違いない。別れたときのまの夫が、共にあった時の喜びを語りかける。時間と距離のねじれが、夢よりさめた後の失墜をすでに予想させている。夢は、夫とともに帰る願いもろとも、はかないのである。¹²⁾

最後にもう一首、曹植の「雜詩」(『文選』卷二十九)：

高臺多悲風 高台悲風多し

朝日照北林 朝日は北林を照らす

之子在萬里 之の子万里に在り

江湖迴且深 江湖迴かにして且つ深し

方舟安可極 方舟安くにか極るべき

離思故難任 離思故より任え難し

孤鶻飛南遊 孤鶻飛びて南遊し

過庭長哀吟 庭を過ぎて長く哀吟す

翹思慕遠人 翹思して遠人を慕い

願欲託遺音 願いて遺音を託さんと欲す

形影忽不見 形影忽ち見えず

翩翩傷我心 翩翩として我が心を傷ましむ

この詩が、実際のどのような状況を受けて書かれ、何を喩えているのかという穿鑿は、置いておこう。本論は、額面通り、表現された離思のみを読みとることとする。

耐え難き離思にさいなまれ、高台にたたずむ。思う相手は遠くにいて、見渡す限りの空間の外にあり、そこにたどりつく術はない。二人を隔てる万里の距離は、間に横たわる江湖を表現することで、いっそうの距離感を読み手に与え、路の険しさは、舟がないという表現によっている。第1句、朝日に照らされる、明るい情景の歌いだしも、これまで眺めてきた作品から想像されるように、一夜思いに沈んで眠りにつけなかった翌朝の情景であると理解できるであろう。

遠望する場、離思に沈む場である高台には、いつも悲風が吹く。悲風ということば、もちろん、風が悲しいのではなく、吹く風に哀しみが投影されているのであるが、離思を歌う作品によく使われることばである。その風吹く空を、一羽の鴈が飛んでゆく。人が渡れぬ空の通い路を、鳥は悠々と飛び越えてゆく。見渡せるかぎりの空間の向こうへ鳥は消え、同じく高台からは見えない彼方を目指す人の思いは、悲風の中に取り残されるのだ。

四

前述したように、銅雀台は、建安十五年に建てられた。後、金虎台・冰井台が建てられ、鄴の三台と呼ばれる（陳寿は、十八年に金虎台が建てられたことは記すが、冰井台については何も記さない）。

建安十三年曹操は漢の丞相となり、その権勢はますます不動のものとなった。銅雀台の建造は、まさにこういう状況の下に行われたのである。そして、建安十八年、天子の詔が下り、曹操は魏公に任命され、九錫が与えられた。陳寿『三国志』は、潘勗が書いた「魏公に九錫を冊する文」を載せるが、その『文選』卷三十五に収めるテキストには、「使をして節を持し、御史大夫盧をして君に印綬・冊書・金虎符第一より第五に至る・竹使符第一より第十に至るを授けしむ」とある。金虎台という名は、まさしく曹操が魏公に封ぜられたことを記念するに違いない。残る冰井台には氷室があったとされるが、晋の歴史家陳寿が三台すべてについて記さなかったのは、曹操が建てた三台が、天子が建てるべき三台を冒すものゆえに、その非を直筆するのを避けたものか。

このように、三台は曹操の強大な権力の象徴としてそびえたったわけだが、『水経注』に引かれ、今に残る曹操の「登台の賦」の一句に、「長明を引き、街里に灌ぐ」と歌うように、曹操は高台から自分が整備し築き上げた鄴城を得意な気持ちで見下ろしていたであろう。

さて、銅雀台を後世の文人達のテーマに押し上げた要因は、曹操の遺令である。それは、陸機が「魏の武帝を弔う文」（『文選』卷六十）を書くきっかけとなり、陸

機がその内容を弔文の中に書き記している。

元康八年、機始めて台郎を以て出て著作に補せられ、秘閣に遊んで魏の武帝の遺令を見る。愾然として歎息し、懷を傷ましむること、之を久しくす。

曹操の死後七十八年、陸機は著作郎となって宮中の書庫に入り、曹操が死に際して残した命令を読み、溜息をつき、胸を痛めた。

陸機は曹操を尊敬していた。弟陸雲に書き送った書には、曹操の遺品を収集する傾倒ぶりが描かれているが、陸機の曹操への傾倒の理由は何であつたらうか。高橋和巳氏は、陸機の曹操に対する日頃の憧憬や傾倒が、遺令に述べられた秘められた現実に触れて変容する一種の幻滅の所産であると述べられた¹³⁾。ただ、陸機の場合、漠然とした英雄主義から曹操に傾倒したのではない。北上して他人の推挙によって何と才能を認められ、活躍の場を求めようとし続けた武人であり文人である陸機は、才能あるものならばどんな人物でも登用せよと「賢を求むる令」を出し、多くの才能ある武人・文人を配下に招き寄せた器量を持った曹操に憧れ、ついに曹操のような君主に出会えないことを嘆き続けた。かれの英雄像はきわめて現実的な像を結んでいたはずだ。

そのような存在である曹操の遺令を読んで、陸機は言う、「天を廻らし日を倒にするの力を以てしても、形骸の内を振るう能わず。世を済い難を夷らぐるの智にして、困しみを魏闕の下に受く。已にして上下に格る者も区々たるの木に蔵せられ、四表に光つる者も最爾の土に翳る」。絶大な力と名声を手にして英雄曹操も死から逃れることはできなかった。そして、陸機が理解できないというのは、「雄心は弱情に摧け、壯図は哀志に終わり、長筭は短日に屈し、遠迹は促路に頓す」（曹操の雄々しい心が弱気に負けてしまい、壮大なはかりごとが死に面しての悲しみに終わってしまい、長く先を見通した計略も遠大な足跡も、有限である人の短い人生の制約故に頓挫してしまう）ということであつた。このように陸機を幻滅させ、「憤懣」させた遺令の内容の中心は、弔文の序文の最後に言うように、「情累を外物に繋げ、曲念を閨房に留むるが若きは、亦た賢俊の宜しく廃すべき所か」という所

にあると陸機には思われた。死を前に物質的なことから恋恋とし、婦人のことを気にかける、それが陸機が曹操の死と向かい合った態度のうちで、特に気に入らぬ点であったのだ。

では、その遺令の内容とはどういうものなのか、序はこう続ける。

「姫女を持して季豹を指して、以て四子に示して曰く、以て汝を累わす、と。因りて泣下る。傷ましきかな、曩は天下を以て自ら任じ、今は愛子を以て人に託す。」

これは、遺令をそのまま記したのではない。陸機の失望が多分に混入している、再構成された物語である。原文を推測するに、四人の子供達に末の子の面倒を頼むと書き記されていたのだろう。その表現が陸機にとっては少々女々しいものとして映ったのかもしれないが、彼の曹操に対する失望がいかほどであったかと思うとき、実際にこうまでなさげなく思われる文面であったかどうか。甲文の本文では、こう記す、「姫女を執りて以て嘸瘁し、季豹を指して寃罵たり。氣は襟を衝いて以て嗚咽し、涕は睫に垂れて洩瀾たり」と。序はさらに続けて：

「房闈の内に婉谿とし、家人の務めに綢繆たるは、則ち密に幾きか。(奥の女性達に未練を残し、家のものたちの務めにこまごまと気を配るのは、ちよつと細かすぎるのではなからうか。)

続いて、その具体的な内容を述べる。まず、女性達のこと。

「又た曰く、吾が婕妤・妓人は、皆銅爵台に著き、台堂の上に於いて八尺の牀・總帳を施し、朝晡に脯糲の属を上げ。月の朝と十五には、輒ち帳に向かいて妓を作せ。汝等、時時銅爵台に登り、吾が西陵の墓田を望めと。」

「婕妤・妓人はすべて銅雀台に留め置き、台上の堂において自分の魂をむかえる牀

と總帳をしつらえ、朝夕乾し肉乾し飯などのお供えをし、月の朔日と十五日の祭には、帳に向かつて歌い舞えと曹操は申しつける。そして、子供達にも、時おり銅雀台に登って、自分の墓を眺めやれと言っているのである。これについて、甲文は、「清弦を徹えて独り奏し、脯糲を進めて誰か嘗めん。總帳の冥漠たるを悼み、西陵の茫茫たるを怨む。爵台に登りて群悲し、美目貯りて其れ何をか望まん」と述べる。曹操が妓女達にいつけたことの空しさを言うのである。曹操亡き後、漢より禪譲を受けた曹丕は、洛陽を都と定め、鄴を後にする。妓女はともかく、子供達はどれほどこの遺令を守ったであろうか。

「又た曰く、余香は諸婦人に分与すべし。諸舎中の為す所無きは、履組を作るを学びて売れ。吾が官を歴て得る所の綬は、皆藏中に著けよ。吾が余の衣裳は、別に一藏を為すべし。能わざれば、兄弟共に之を分かつべしと。」

こまごまとした指示が続く。残った香は婦人達で分けよ、何もすることが無くなった女達は靴の飾り紐を作ることを学び、それを生業にせよ。自分が官を歴任して得た印綬はすべて藏にしまい、残した衣類は別の一つの藏に収め、もしもそうできなければ、兄弟で分けよ、と。しかし、子供達は、この遺言に背き、藏に収めず、分けてしまうのであった。「既にして竟に分かつ。亡ぶる者は以て求むること勿かるべく、存する者は以て違ふこと勿かるべし。求むると違ふと其れ両つながら傷ましからざらんや」と陸機は続ける。結局子供達は、銅雀台に登って墓を望むことについて、印綬や衣服の処理についても、父の遺言を守らなかつたのである。だが、子供達には父の死後、遺言を守らなくてもすまされる自由があったのに対して、妓女達はどうであったか。曹丕達が洛陽に去って後もなお、彼女たちは曹操に仕え続け、遺言の遵守を強制されたのではなからうか。

さて、陸機の思い入れを離れて、この曹操の遺令を考えてみよう。特にここで注目したいのは、曹操の妓女や婦人達に対する思いであるが、陸機にしてみれば、これは、賢俊が宜しく廃すべき「曲念を閨房に留むる」ことであり、まったく婦人達に対する未練の現れでしかないわけであるが、果たしてそうなのだろうか。

分香は、訣別の表現であり、靴紐は、我無き後の生活を思いやつてのことであり、未練というものは異なるであろう。それでは、銅雀台に留め、死せる自分のために舞いつづけよというのは未練であろうか。ここに注意すべきは、兄弟達にも台上から墓を眺めるよう指示していることである。たとえ、未練という情があるにせよ、それは女性だけを対象にしたものではない。

死者は、忘れられて始めて、本当に死ぬのである。曹操が懼れたのは、彼を思いだし、死せる彼と精神的な交流を持つとする時を、残されたものたちが持たなくなるものではなかったか。鄴城の北西に聳えたつ高殿の、そのもつとも高い銅雀台から、かれは生前、自分が施した治水の成果を見、古、同じく鄴で治水した西門豹の祠を西の方に望んだ。死の二年前、曹操は、西門豹の祠のある西原に自分の墓田を定めたが、これが西陵である。その令には、古の埋葬は、瘦せた土地を選んだといい、それを第一の理由として墓所を選んだようであるが、西陵を自分の墓所としたわけは、けつしてそれだけにとどまらないだろう。ともに鄴城を育てた人物であり、ともに淫祀を断つた人物である。尊敬する西門豹の墓所である西陵を銅雀台から眺めやりながら、曹操の心の中には西門豹が生者として蘇るような時間があったこと、それが墓所決定の大きな要因ではないか。

妓女達への要求も子供達への要求と基本的な性格は同じである。生きているときの変わらぬ場が継続される限り、体は亡びても、妓女達の脳裏の中の自分は亡びない。帳と牀は、妓女達にむかって亡き自分を再生させる舞台装置である。陸機の言うような、美目が空しく西陵を見るところではなく、曹操のもくろみは、歌舞の場に彼女たちが曹操を思い出し、生前の曹操と共有した状況の中に曹操を蘇らせ、帳によって隔てられ作り出された魂の降臨の空間に備えられた牀の上に、かつて漢武帝が帳の中に死せる李夫人の影を見たように、曹操をありありと感じることであり、その時、思い出され感じとられた曹操自身が、妓女達の心の中で生き続けることができるということであつたはずだ。

高台から眺める遙かな距離は、遙かな時間をはらむ。想像の中で、夢の中で、人は相手を思い、相手が自分を思うことを求める。生と死という絶対的な距離もまた、離思に悲風吹く場の中にあるのだ。

陸機の甲文は憤懣に彩られる。曹操の遺令の引き方にしても、文献をそのまま引用するのではなく、自分の感情によって脚色を施している。陳寿や裴松之が記録した遺令や、また、陸機自身が、「其の冢嗣に顧命し、四子に貽謀する所以を觀るに、経国の略は既に遠く、隆家の訓も亦た弘し。又た云く、吾軍中に在りて法を持つるは是なり。小しく忿怒して大なる過失あるに至りては、当に効うべからざるなりと。善きかな、達人の言なり」と言うように、英雄らしい遺命もまたあつたのだ。甲文の序文で、陸機は客の口を借りて自分に論難する。「今乃ち心を百年の際に傷め、哀を無情の地に興す」と。だが、死は、けつして情なき地などではありえない。死者とかかわろうとする生者がいるかぎり、そこには情が存在する。その情がつくる空間の中、陸機は悲風の向こうについて曹操の姿を遠望しようとはしなかつたのだろうか。

故郷の別荘でかつて聞いていた鶴の鳴き声をもう聞くことはできない、と嘆いて陸機は死んだ。かれ自身の離思のうたのなかで、婦人に「游宦会らず成ること無からん、離思常には守り難し」(「擬明月何皎皎」『文選』卷三十)と歌わせたのは、奇しくも運命の予言となつてしまったわけであるが、かれが世を去るに当たつて、この世にいかなる離思を残して逝つたのか。『晋書』の伝には、陸機が成都王に残した遺書は、「詞甚だ悽惻たり」と記されるが、生者に自分を遠望してもらわんと願つた曹操の願いを、陸機ももつたであろうか。

五

陸機の死より約二百五十年の後、梁が滅ぶ。その時代に、悲哀と憤懣を表現する手だてとして、銅雀台というモチーフを愛用する文人が登場する。後半生を亡国の人として送り、郷関の思いの内に生きた、庾信である。

かれの作品にとりあげられる銅雀台は、多分に陸機の表現の影響下にある。北入した庾信は、同じように祖国の消失に会い、北方へと移り住んだ陸機に親近感を懷き、作品の中でも陸機その人に触れることが多い。

「哀江南の賦」では、簡文帝を思い起こし、「昔の虎の踞り龍の盤ち、加うるに黄

旗紫氣を以てするも、狐兔に随いて窟穴し、風塵と与に疹瘁せざるは莫し」とうたう。庾信は回想の中に、帝王の宅たる江南の地を構築する。現実世界の江南という地は、主が狐や兔といった状態となり、荒れ果てたのだが、その原因は、侯景の乱に始まる戦乱のためであった。庾信は、回想の空間の高みに登り、今は亡き江南を眺望する。

「西のかた博望を瞻、北のかた玄圃に望む。月榭風台、池平らぎ樹古びたり。弓を玉女の窓扉に倚け、馬を鳳凰の樓柱に繫く。仁寿の鏡は徒らに懸かり、茂陵の書は空しく聚る」。一望すれば、昭明太子が築いた庭園が見わたせる。その有様は、公子が遊び宮女が憂れうるにふさわしい静かな様子だが、よく見れば宮女の姿は窓辺に見えず、そこには弓が置かれ、高殿の柱には軍馬がつながれている。すでにここは帝王の宅ではないのだ。仁寿殿にあったような大きな鏡も、王が集められた書籍も、主無き今、もはや役には立たない。

「夫の立德立言、謨明るく寅亮かなるが若きは、声は繫表より超え、道は河上より高し。更に浮丘に遭わずして、遂に師曠に言無し。愛子を以て人に託するも、西陵を知りて誰か望まん」。かの素晴らしき徳と道を積んだ簡文帝も、結局は死を免れなかった。死に臨んで、曹操と同様に愛しいわが子を人に託した。天下を以て自任すべきはずだった太子も最後にはこのありさま。そして、墓所を眺めてくれる子供達さえもいなくなったのだ。

陸機は、曹操の子供達が西陵を望めという遺言を守れなかったことを直接には表現しなかったが、「以愛子託人」という措辞は、陸機の弔文を踏襲し、庾信はこのことよって簡文帝の子供達の末路を暗示している。

また、「擬詠懷」の第二十三首は、彼方から、元帝の死を見やることしかできなかったことについての思いを歌うが、その最後の四句――

鼎湖去無返 鼎湖去りて返る無く

蒼梧悲不從 蒼梧従わざるを悲しむ

徒勞銅爵妓 徒らに勞す銅爵の妓の

遙望西陵松 遙かに西陵の松を望むを

元帝は江陵に死し、庾信は遙か遠く長安にいた。力をつくし、皇帝のために身をささげることはかなわなかったのである。生き残った自分は、曹操死してのち、西陵の墓田を眺め続けた銅雀台上の宮女達のように、役立たずのままおめおめと生きながらえて、彼方から皇帝の墓所を想像のなかに眺め続けるだけだと庾信は嘆くのだ。「擬連珠」第十一首も、同じく、元帝の死について、「雀台の絃管、空しく西陵の松を望む」とうたう。

ここに表現された宮女達の姿は、陸機の弔文の「爵台上に登りて群悲し、美目睇りて其れ何をか望まん」という表現を襲うが、庾信は、自分の心情を宮女の身に託して表現し、その徒勞と空虚な感覚をより強く表し、遠望し離思を懐くことを表現し得ている。

銅雀台の妓女という存在を役に立たない、価値のないものとして捉えることは、早く『世説新語』言語篇に見えている。東晋の王献之が王恭に語った、西晋の羊祜に対する批評に、「王子敬 王孝伯に語りて曰く、『羊叔子は自ら復た佳きのみ。然るに亦た何ぞ人事に与かる。故より銅雀台上の妓に如かず』と」言うのがそれである。

所謂陸沈の時期を過ぎ、銅雀台と妓女というテーマは、樂府の世界に取り込まれる。庾信は、第三者にこと寄せて作者の感情を表現する樂府詩の素材として、このテーマがひとつとなった銅雀台の妓女にこと寄せて、自分の心情を吐露している。今、『樂府詩集』によつて、そのような樂府詩を見てみよう。

『樂府詩集』卷三十一、相和歌辞、平調曲に収める「銅雀台」「銅雀妓」の詩について、郭茂倩は、『鄴都故事』と陸機の弔文を引き、解説する。『鄴都故事』とはいかなる書物か不詳であるが、基本的には陸機の弔文の内容と異なる記述はない¹⁴⁾。解説の結びは、『樂府解題』を引いて、「後人其の意を悲しみて之が詠を為すなり」という。もともと時代の古い作品は、謝朓の「銅雀妓」である(『文選』卷二十三は「謝咨議の銅爵台を詠むに同ず」と題する)。

總帷飄井幹 總帷井幹に飄り

樽酒若平生 樽酒平生の若し

鬱鬱西陵樹 鬱鬱たる西陵の樹

詎聞歌吹聲 詎ぞ歌吹の声を聞かん

芳襟染淚迹 芳襟に淚迹染み

嬋娟空復情 嬋娟として空しく情を復らす

玉座猶寂寞 玉座猶お寂寞たり

況乃妾身輕 況や乃ち妾身の輕きをや

李善は、西陵の樹は非難の意を含むというが、そうすると、この詩は、宮女をこのような状況に置いた曹操を責める作品ということになる。そう読めば、「玉座」が寂寞たるようすであるという表現には、なお一層の空虚な思いがこめられていることになる。死者は、歌吹の音を聞くことはできない。なのに、曹操は妓女を銅雀台に空しく留め置いた。死者に仕え続けることを余儀なくされた妓女のあまりにもやるせないこと。

梁以降の作品は、謝朓の作品とは趣が稍や異なり、曹操と妓女の関わりは背景の中へと吸収され、作品は、主に宮女のうつろな心情を中心に据え始める。何遜の「銅雀妓」：

秋風木葉落 秋風木葉落ち

蕭瑟管絃清 蕭瑟として管絃清し

望陵歌對酒 陵を望みて歌いて酒に対し

向帳舞空城 帳に向かいて空城に舞う

寂寂簷宇曠 寂寂として簷宇曠く

飄飄帷幔輕 飄飄として帷幔輕し

曲終相顧起 曲終わりに相顧みて起つ

日暮松柏聲 日暮 松柏の聲

また、劉孝綽の「銅雀妓」：

雀臺三五日 雀台三五の日

歌吹似佳期 歌吹は佳期に似る

定對西陵晚 定めて対す西陵の晩れ

松風飄素帷 松風素帷を飄す

危絃斷更接 危絃断ちて更に接し

心傷於此時 心此の時に傷む

何言留客袂 何ぞ客を留むるの袂と言わん

翻掩望陵悲 翻つて掩いて陵を望みて悲しむ

どちらの詩も、もはや曹操への直接的な関心はない。うたうのは、死者に仕え続けねばならない、妓女の悲しみだけである。「長袂面を払い、善く客を留む」、生者を樂しませうる舞に翻る袂も、空しく陵を眺めるかんばせを覆うのみ。

江淹の「銅雀妓」は、「武王金閣を去り、英威長に寂寞たり。邑劍頓に光無く、雜佩も亦た銷燼す」と武帝なき後の、さびれた楼上の様子を描写こそすれ、非難の意はない。梁から北齊に入った荀仲舉、陳の張正見の「銅雀台」、いずれも妓女のやるせなさを描くことにますます重点が置かれ、曹操は作品の情景を作り出す道具建てとなつてゆく。これら『樂府詩集』卷三十一の諸作品に表現された妓女達が眺める行為には、何ら離思を懐いて遠望する要素はない。

これらの作品は、いずれもその措辞を陸機の弔文に借りるが、もはや陸機が曹操に対して懐いた落胆や失望はない。勿論、そもそも陸機の弔文が、曹操のために書かれたものであり、陸機個人の強い曹操への思いの上に書かれたのに対し、これらの詩は、曹操にまつわる故事に取材した樂府題の創作の興味の上に書かれたのであるから、しごく当たり前のことではあろう。

ただ、このような樂府題製作の場を経験した庾信が、このテーマに再び陸機が懐いていたのと同じような作者の心の痛みを反映させる力を与えたことはまことに興味深い。張正見が「惜しむべし年年涙し、俱に陵を望む中に尽くるを」と歌うとき、悲哀は涙する妓女の身上だけに限定されている。そこには、妓女のむなしい気持ち表現するための遠望が表現され、「死者曹操を遠望する」悲しみはな

い。しかし、庾信は、簡文帝・元帝を遠望する自分の姿を銅雀台の妓女に託し、そこに、遠望の悲哀、建安の詩に見えた離思のやるせなさを表現した。まさしく、庾信が六朝の掉尾を飾る、建安の風骨を受け継いだ文人であるといえる一端を示すものであろう。

結 び

陸機の憤懣に彩られた表現は、曹操の銅雀台上の妓女達への遺命を空しいものとして照らし出し、ほぼ同時代の王献之は、その遺命のもとに台上に留め置かれた妓女達自体を価値のないものの代名詞として使った。英雄としての曹操は、陸機にあつてはまことに大きな存在だったため、ひとりの人間としての曹操の、死に望んで、この世に残るもの達とお互いに遠望しあい、交感する場を継続させたいという気持ちの吐露は、陸機を失望させただけだった。

齊梁以降、銅雀台はこの曹操の故事の場として、楽府題のテーマとなる。曹操は、詩にうたわれる情況の契機たる存在になり、文人達は、死者に仕えたまま空しく舞い続けて年をとってゆく妓女達のやるせない気持ちを描くことに力を注ぐこととなった。

さて、沈約はその「郊居の賦」(『宋書』卷一百)において、齊の世における、文惠太子のもとでの、遊宴の有様を回顧し、「或いは席を列ねて詩を賦し、或いは觴を班ちて宴語す。總帳一朝にして冥漠たり、西陵忽として其れ蕙楚たり」という。沈約の回顧のなかで、宴会の席になりひびいていた快い歌吹の音は、太子の死を境に消え去る。沈約は、太子の死を、曹操の故事によって表現したのである。劉孝綽の表現を借りるならば、回想する沈約の中で鳴り響く「歌吹は佳期に似」たまでであり、表現の空間のなかで、思い起こされる歌吹を聞きながら、沈約は太子なき總帳の前にたたずむ。かれの位置は、まさしく銅雀台上の妓女達と同じなのである。庾信の表現のさきがけといえるであろうか。

庾信は、はっきりと自分を妓女達の位置に置く。このことによって、作品の舞台としての銅雀台は、ふたたびその舞台上に悲風の中にたたずむ、離思に囚われた人を

もつことができたと言えるだろう。まさしく志を得ぬ王粲が、故郷を眺め、二度と戻らぬ不可逆の時を遠望によって遡らんとしていたように。庾信の離思の情の強さが、沈約の表現をさらに一歩深化させたのだろう。

遙かな空間と時を超えんとして、人はあるいは想像の中に飛び上がり、あるいは、高きに登って遠望する。曹操は、遠望され続けることによって、生者のなかで生き続けることを願った。失望した陸機の心には、人間曹操の願いは届かなかつたが、庾信には、人間曹操が持っていた願いの理解の兆しが見え始めている。陸機とは違って、庾信が、妓女の位置に身を置き想像の中で登楼し遠望したとき、西陵かと思まごう彼方には、たとえ帰ろうとしても帰れない故地、そして誰もがけつしてさかのぼれない過去の空間を見渡していたのであり、亡き簡文帝や元帝もはるか彼方から彼を眺めているのを、庾信は感じとっていたのではなからうか。

注

- (1) 『三国志演義』第四十四回。
- (2) 銅雀台が建てられたのは建安十五年、赤壁の戦いは建安十三年であるから、この脚色はそもそも時間の前後までも跳躍してしまっている。
- (3) 森野繁夫『文選雑識』第二冊(第一学習社、一九八二年)76ページ。
- (4) 陸侃如『中古文学繫年』に載せないものに、左思「魏都賦」の李善注の記載がある。「文昌殿の西に銅爵園あり、園中に魚池・堂皇有り。……銅爵園の西に三台有り。中央に銅爵台有り、南は則ち金虎台、北は則ち冰井台、屋一百一間有り。金虎台一百九間有り。冰井台百四十五間有りて、上に冰室有り。三台は法殿と皆な閣道相通す。……」
- (5) 芸文類聚62、初学記24にも載せる。
- (6) なお、陸侃如氏は、『水経注』卷十にその二句が引かれる、曹操の「登台賦」を建安十七年に繫年し、曹丕曹植兄弟の作と同時の作であろうと推定する。
- (7) 建物の高さが君主の権力を表現する一方、また一方で、高台のイメージが権力の退廃を表すことについては、ジャン・ピエール・デイエニイ「清台に登りて以て志を蕩う——曹植を読む——」に簡潔にまとめられている。なお、本論は、同論文に非常に啓発を受けた。ここに特に記しておきたい。(鑑賞中国の古典⑫『文選』(角川書店、一九八八年)所収)
- (8) 李賢は『漢書』の「仙人は樓居を好む」という記述を引き、三秀が楚辞(九歌、山鬼)に出る言葉であることを注する。
- (9) 「居」の文学——六朝山水/隱逸文学への一視座(『中国文学報』第42冊)。

- (10) 注に言う、「按ずるに此の集二韻は俱に第十卷に在り。今宋本の目録は三首に作れば、此れ疑うらくは混入にして、徐刻本も亦た載せず。」
- (11) 「高所に登るのは、ただ想像力の目を馳せることによつて実現されうるといっただけにせよ、愛する人を見、その人と再会する位置に身を置くことにはかならない。だが、高所に登るのは、曹植が「夫れ形の能く見ゆるは高きに如くは莫し」(「承露盤の銘」)ともいつているように、また見られる位置に身を置いて、想像力の力で愛する人に合図、つまり変わらぬ愛の誓いを伝達することでもある。登楼は、孤独に閉じこもる状態から逃れて、思考の作用により心に思う対象と意志を通わせる行為である。」(前掲デイエニイ氏論文)
- (12) 交感の場としての夢、また幽通ということなどは、さらに検討する必要があると思われる。夢については、錢鍾書『管錐編』六九参照。
- (13) 「陸機の伝記とその文学」、『中国文学報』第11・12冊、また、全集第15巻。
- (14) 『鄴都故事』曰、「魏武帝遺命諸子曰、『吾死之後、葬於鄴之西崗上、与西門豹祠相近、無威金玉珠寶。余香可分諸夫人、不命祭吾。妾与伎人、咸著銅雀台、台上施六尺牀、下總帳、朝晡上酒脯糒糲之属。每月朝十五、輒向帳前作伎。汝等時登台、望吾西陵墓田。』」

“Tongquetai” : a Lady on a Tower

Koichi Morita

Abstract : “A lady on a tower” is one of the most popular motifs of poetry in the time of the Six Dynasties. Depicting ladies trying to get a view of their men from afar, the poets express the pain of separation. And in such poetry, the ladies gazing into the distance simply represent a longing for their men to try and look back at them also.

“Tongquetai” was a viewing platform built by Zao Cao. When he faced death, he ordered his chorus and dancing-girls to continue to sing and dance for him after his death. Lu Ji, who held Zao Cao in respect, was frankly disappointed at his last wish, and could not understand his desire to rise from the dead and look back at his chorus and dancing-girls singing and dancing for him. Mainstream poetry sung by poets from Lu Ji onwards consists of works which represent the Tongquetai girls as leading a fruitless existence. But Yu Xin, in the Liang Dynasty, whose people later suffered ruin and came into the bondage of separation, began to describe the Tongquetai girls as also being in bondage to the pain of separation, just as Zao Cao had wished them to be.